国語

（1～13ページ）

注意

1 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
2 解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
3 受験番号は、下記の「受験番号欄記入例」に従って正確にマークしなさい。
解答用紙にはマーク式解答欄の番号が 1 ～ 50 までありますが、使用しない解答欄も含まれています。
4 試験時間は **六〇分** です。
5 試験開始後、問題用紙に不備（ページのふぞろい・印刷不鮮明など）があったら申し出なさい。
6 問題の内容についての質問には、いっさい応じられません。
7 中途退出は認めません。試験終了後、この問題用紙は持ち帰りなさい。

受験番号欄記入例

受験番号欄				
Y	8	1	5	0
●	⓪	⓪	⓪	●
	①	●	①	①
	②	②	②	②
	③	③	③	③
	④	④	④	④
	⑤	⑤	●	⑤
	⑥	⑥	⑥	⑥
	⑦	⑦	⑦	⑦
	●	⑧	⑧	⑧
	⑨	⑨	⑨	⑨

数字の位置に注意してマークしなさい

アルファベットを除く４ケタの数字を記入しマークしなさい

マーク式解答欄記入上の注意

1．解答は，ＨＢの黒鉛筆を使用して丁寧にマークしなさい。
《マーク例》
良い例 ●
悪い例 ◍ ◔ ⊗ ◒ ○
2．訂正する場合は，プラスチック消しゴムで，きれいにマークを消し取りなさい。
3．所定の記入欄以外には，何も記入してはいけません。
4．解答用紙を汚したり，折り曲げたりしてはいけません。

I　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

漱石は、当時主流であった自然主義やそれに反撥（はんぱつ）して登場したネオ・ロマン派と同時代に仕事をした。新帰朝者としてイ[a]ケイの的ではあったが、彼の作品は当時の自然主義的なブンダン[b]にとって古めかしい、あるいは子供っぽいものとしか見えなかった。自然主義者が漱石を認めたのは、最後から二つ目の作品、『道草』においてである。他方、ネオ・ロマン派や白樺派は漱石を好んでいたが、それはむしろ自然主義的でないということだからにすぎない。だが、彼らは漱石がロマン主義と自然主義のいずれもが共有する基盤、つまり「近代文学」そのものを疑っていたことに気づかなかったのである。

漱石の態度は近代文学に対して中世あるいは古代の文学を対置することから程遠かった。近代に対して中世、古代、あるいは東洋を対置する人たちは少なくない。しかし、すでに中世とは近代に対して中世を賛美するロマン主義によって想像的に見出されたものであり、東洋（オリエント）もまた同様に、近代西洋への批判として創造された表象である。だから、もし人が英文学に対して漢文学を称揚[X]するとするならば、そのようなスタンスは近代文学を出るどころか、近代文学のたぶん最もありふれた一典型にしかならないのである。[1]漱石が「漢文学」と呼ぶのは、そのようなものではない。漱石にとって、「漢文学」はもはや実体ではなく、近代文学の彼岸に想定されるべき不確かな何かだったのだ。

くりかえせば、中世や古代の文学あるいは漢文学はすでに近代文学の視点によって再構成されたものである。否定するにせよ賞賛するにせよ、それらはすでに近代文学に属しているのだ。そのことを知らないならば、どうしてそこから出ることができようか。このことを理解するために、私は、漱石自身がそうしたように絵画を例にとって考えたい。たとえば、漢文学は絵画において山水画になぞらえられる。[2]そのとき、次の点に注意しなければならない。

宇佐美圭司（注1）は、われわれが「山水画」と呼んでいるものがすでに近代西洋の風景画を通して見いだされたものであることを指摘している。《山水画という名称はここに展示されている絵画が実際に描かれた時代にはなく、四季絵とか月並と呼ばれていた。山水画は、明治の、日本の近代化を指導したフェノロサによって、命名され、絵画表現のカテゴリーの中に位置づけられるようになった。とすれば、山水画という規定自体は、西洋近代的な意識と、日本文化とのズレによって出現したということになる》（宇佐美圭司「「山水画」に絶望を見る」『現代思想』昭和五二年五月号）。

つまり、山水画という名は、まるでそれが西洋の風景画と同様に風景を描いたかのように思わせる。西洋において風景画は幾何学的遠近法とともに生まれたといってよい。【A】それまでの絵画において、風景は宗教的な物語や歴史的な物語を描いた絵の背景としてあったにすぎない。ところが、幾何学的遠近法は一点から見た透視図法であるため、物語的な時間をふくむ対象を処理することが難しかった。そこに、物語をもたない、たんなる風景としての風景が描かれる必然があったのである。【B】

ところが、そのような風景画から見ると、山水画ではまさに風景としての風景が描かれているようにみえる。【C】しかし、山水画における風景は、むしろ西洋における宗教的な絵画に近いというべきなのだ。中国において山水は宗教的対象であったがゆえに、Y執拗（しつよう）に描かれたのである。【D】宇佐美圭司は「山水画」を、西洋の幾何学的遠近法と比較してつぎのようにいっている。

> 山水画の空間を語るために、山水画の場と時間をケン[c]トウしてみよう。山水画における〝場〟のイメージは西欧の遠近法における位置へとカン[d]ゲンされるものではない。
>
> 遠近法における位置とは、固定的な視点を持つ一人の人間から、統

一的に把握される。ある瞬間にその視点に対応する総てのものは、座標の網の目にのってその相互関係が客観的に決定される。我々の現在の視覚も又、この遠近法的な対象把握を無言のうちにおこなっている。これに対して山水画の場は、個人がものに対して持つ関係ではなく、先験的な、形而上的な、モデルとして存在している。(注2)

それは、中世ヨーロッパの場のあり方と、先験的であるという共通性を持つ。先験的なのは、山水画の場にあっては、中国の哲人が悟りをひらく理想像であり、ヨーロッパ中世では、聖書、及び神であった。

中世ヨーロッパの宗教画と中国の山水画は、対象をまったく異にするにもかかわらず、対象を見る形態において共通していたのである。山水画家が松を描くとき、いわば松という概念を描くのであり、それは一定の視点と時空間で見られた松林ではない。[3]「風景」とは「(　　)」対象にほかならない。山水画の遠近法は幾何学的ではない。ゆえに、風景しかないように見える山水画に「風景」は存在しなかったのである。

文学に関しても同じことがいえる。たとえば、松尾芭蕉は「風景」を見たのではない。彼らにとって、風景は言葉であり過去の文学にほかならなかった。たとえば、芭蕉の「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」という句は、杜甫の漢詩からの引用である。柳田国男がいったように、『奥の細道』には「描写」は一行もない。「描写」とみえるものも「描写」ではない。同じことが井原西鶴についてもいえる。リアリスト井原西鶴なるものは、明治二十年代以後に近代西洋文学の視点から見出されたものにすぎない。そして、そのような解釈は皮相且つ的外れである。俳諧師であった西鶴の作品に見出されるリアリズムとは、いわば「グロテスク・リアリズム」(注3)(バフチン)なのだ。

(中略)

絵画から文学を見ると、近代文学を特徴づける主観性や自己表現という考えが、世界が「固定的な視点をもつ一人の人間」によって見られたものであるという事態に対応していることがわかる。幾何学的遠近法は、客観のみならず主観をも作り出す装置なのである。しかるに、山水画家が描く対象は一つの主観によって統一的に把握されたものではない。そこには一つの(超越論的)自己がない。文学におきかえていえば、そのことは、透視図法のような話法が成立しないならば、近代的な「自己表現」という見方が成立しないということを意味する。

明治以後のロマン派は、たとえば万葉集の歌に古代人の率直な「自己表現」を見た。しかし、古代人が自己を表現したというのは近代から見た想像にすぎない。そこでは、むしろ、人に代わって歌う「代詠」、適当な所与の題にもとづいて作る「題詠」が普通であった。しかるに、近代文学に慣れた者は、その見方を前代あるいは古代に投射してしまう。のみならず、そのようにして[4]「文学史」を捏造(ねつぞう)するのである。明治二十年代に確立された日本の「国文学」とその歴史はそのようなものである。われわれにとってジメイ[e]とみえる「国文学史」そのものが、「風景」の発見のなかで形成されたのだ。漱石が疑ったのはそのような風景である。

(柄谷行人『定本　日本近代文学の起源』より)

(注)1　宇佐美圭司――日本の画家(一九四〇－二〇一二)。
2　先験的――哲学で、認識が経験に先立つさまのこと。
3　グロテスク・リアリズム――ソ連の文芸学者バフチン(一八九五－一九七五)によって提唱された、民衆の笑いのこと。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問一　傍線部a～eを漢字表記に改めた場合、それと同じ漢字を傍線部で用いるものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

1　a「イケイ」

① 彼はイダイな文学者だ。
② 家長としてのイゲンを保つ。
③ 自然にイフの念を抱く。
④ 計画の失敗をイカンに思う。

2　b「ブンダン」

① ダンサにつまずく。
② カダンに水やりをする。
③ クラスがダンケツする。
④ ザダン会で話がはずむ。

3　c「ケントウ」

① 学力をケンテイする。
② ケンアクな雰囲気になる。
③ ケンヤクして質素に暮らす。
④ ケンアンの事項を解決する。

4　d「カンゲン」

① 貴重品をホカンする。
② 初志をカンテツする。
③ バスが市内をジュンカンする。
④ 戦場から無事にセイカンする。

5　e「ジメイ」

① 本を読んでカンメイを受ける。
② 世界情勢がコンメイする。
③ 議長にシメイされる。
④ 真相をキュウメイする。

問二　二重傍線部X・Yについて、その意味として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

6　X「称揚する」

① 尊いものと考える
② 過大評価する
③ 対照的に捉える
④ ほめたたえる

7　Y「執拗に」

① ねばり強くしつこく
② きめ細かくていねいに
③ 完璧なまでに正確に
④ こだわりをもって

問三　次の一文の入る箇所として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

ゆえにそれらは山水画と名づけられた。

8　① 【A】　② 【B】　③ 【C】　④ 【D】

問四　傍線部1「漱石が『漢文学』と呼ぶのは、そのようなものではない」とあるが、漱石にとっての「漢文学」はどのようなものだと筆者は考えているのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

9

① 東洋文学の範疇（はんちゅう）にとどまるべきものではなく、ロマン主義と自然主義の基盤になるもの。

② 近代西洋の文学に対置されるものではなく、そういう枠組みとは無関係に存在するもの。

③ 近代文学の視点で中世や古代、東洋を捉えた場合に、近代西洋文学より優位に立つもの。

④ 中世や古代よりむしろ近代文学に属するもので、自身の文学を築くうえで不可欠なもの。

問五　傍線部2「そのとき、次の点に注意しなければならない」とあるが、筆者が言いたいのはどのようなことか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

10

① 「山水画」はもともと「四季絵」とか「月並」と呼ばれたように、日本の伝統と関係の深い文化であり、漢文学との関連は薄いものだということ。

② 漢文学は古代から中世を経て近代まで受け継がれてきた文学であるが、「山水画」と呼ばれる絵画は、日本の近代化により生まれたということ。

③ 漢文学という捉え方が近代的であるように、もともと風景画でない絵が近代西洋の視点で捉えられ、「山水画」と命名されたにすぎないということ。

④ 「山水画」は中国の実際の風景を対象としているとは限らず、哲人の悟りの理想像でしかないのに、漢文学の対象は人間の生そのものだということ。

問六　傍線部3の空欄には本文の波線部のうちどれが入るか、最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

11

① 西洋近代的な意識と、日本文化とのズレによって出現した

② 宗教的な物語や歴史的な物語を描いた絵の背景としてあった

③ 固定的な視点を持つ一人の人間から、統一的に把握される

④ 個人がものに対して持つ関係ではなく、先験的な、形而上的な

問七　傍線部4「『文学史』を捏造するのである」とあるが、なぜ筆者はこのように述べるのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

12

① 「文学史」と言われるものは近代的な見方で過去の文学を解釈したものにすぎず、個々の文学の真の姿を捉えているわけではなく、恣意的に作り上げられたものといえるから。

② 「文学史」は近代に確立したものなので、「自己表現」の方法がまだ成立していないため過去の文学の本質を見抜くことができず、誤った見方をしていることになるから。

③ 「文学史」は近代文学に慣れ親しんだ人たちのために作られたものなので、古代や中世の価値観を正しく理解する必要がなく、すべてを近代的に解釈しようとしたから。

④ 「文学史」と言っても通時的に把握したものではなく、文献の乏しい時代の文学については想像するだけなので、実際にはない事柄をでっち上げているのと同じといえるから。

問八　本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選びなさい。　13

① 西洋の宗教画と中国の山水画はその対象は異なっているが、文学に通じる思想性をもち幾何学的遠近法を生み出した点で共通している。

② 文学と絵画を対照させて考えると、芭蕉や西鶴の作品が画期的であるのは、いち早く近代西洋文学の手法を用いていたからだとわかる。

③ 西洋絵画が一つの視点ではなくあらゆる角度から捉えた透視図法で風景を描いたように、近代文学はありのままの人間を描こうとした。

④ 漱石が近代文学に懐疑的だったのは、それが一定の視点で再構成された国文学史上においてのものだと見抜いていたからだといえる。

Ⅱ　次の文章は、一九二九年に発表された萩原朔太郎の「夏帽子」の全文である。これを読み、後の問いに答えなさい。

青年の時は、だれでもつまらないことに熱情をもつものだ。

その頃、地方の或る高等学校に居た私は、毎年初夏の季節になると、きまって一つの熱情にとりつかれた。それは何でもないつまらぬことで、或る私の好きな夏帽子を、被ってみたいという願いである。その好きな帽子というのは(注1)パナマ帽でもなくタスカンでもなく、あの海老茶色のリボンを巻いた、(注2)一高の夏帽子だったのだ。

どうしてそんなにまで、あの学生帽子が好きだったのか、自分ながらよく解らない。多分私は、その頃愛読した森鷗外氏の『青年』や、夏目漱石氏の学生小説などから一高の学生たちを聯想し、それが初夏の青葉の中で、上野の森などを散歩している、彼等の夏帽子を表象させ、聯想心理に結合した為であろう。

とにかく私は、あの海老茶色のリボンを考え、その書生帽子を思うだけでも、ふしぎになつかしい独逸の戯曲、(注3)アルト・ハイデルベルヒを聯想して、夏の青葉にそよいでくる海の郷愁を感じたりした。

その頃私の居た地方の高等学校では、真紅色のリボンに二本の白線を入れた帽子を、一高に準じて制定して居た。私はそれが厭だったので、白線の上に赤インキを塗りつけたり、真紅色の上に紫絵具をこすったりして、無理に一高の帽子に紛らして居た。だがとうとう、熱情が押えがたくなって来たので、或夏の休暇に上京して、本郷の帽子屋から、一高の制定帽子を買ってしまった。

しかしそれを買った後では、つまらない悔恨にくやまされた。そんなものを買ったところで、実際の一高生徒でもない自分が、まさかに気恥しく、被って歩くわけにも行かなかったから。

私は人の居ないところで、どこか内証に帽子を被り、鷗外博士の『青年』やハイデルベルヒを聯想しつつ、自分がその主人公である如く、空想裡の悦楽に耽りたいと考えた。その強い欲情は、どうしても押えることができなかった。そこで、或夏、七月の休暇になると同時に、ひそかに帽子を(注4)行李に入れて、日光の山奥にある中禅寺の避暑地へ行った。もちろん宿屋は、湖畔の(注5)レーキホテルを選定した。それは私の空想裡に住む人物としても、当然選定さるべきの旅館であった。

或日私は、附近の小さな滝を見ようとして、一人で夏の山道を登って行った。七月初旬の日光は、青葉の葉影で明るくきらきらと輝やいて居た。

私は宿を出る時から、思い切って行李の中の帽子を被って居た。こんな寂しい山道では、もちろんだれも見る人がなく、気恥しい思いなしに、勝手な空想に耽れると思ったからだ。夏の山道には、いろいろな白い花が咲いて居た。私は書生袴に帽子を被り、汗ばんだ皮膚を感じながら、それでも右の肩を高く怒らし、独逸学生の青春気質を表象する、あの浪漫的の豪壮を感じつつ歩いて居た。懐中には丸善で買ったばかりの、なつかしいハイネの詩集が這入って居た。その詩集は索引の鉛筆で汚されて居り、所々に凋れた草花などが押されて居た。

山道の行きつめた崖を曲った時に、ふと私の前に歩いて行く、二個の明るいパラソルを見た。たしかに姉妹であるところの、美しく若い娘であった。私は何の理由もなく、急に［　ア　］ような羞しさと、一人で居るきまりの悪さを感じたので、歩調を早めながら、わざと彼等の方を見ないようにし、特別にまた肩を怒らして追いぬけた。どんな私の様子からも、彼等に対して無関心で居ることを装おうとして、無理な努力から固くなって居た。そのくせ内心では、こうした人気のない山道で、美しい娘等と道づれになり、一口でも言葉を交せられることの悦びを心に感じ、空想の有り得べき幸福の中でもじもじしながら。

私は女等を追い越しながら、こんな絶好の場合に際して機会を捕えなかったことの［　イ　］を心に悔いた。

だが丁度その時、偶然のうまい機会が来た。私が汗をぬぐおうとして、ハンケチで額の上をふいた時に、帽子が頭からすべり落ちた。それは輪のように転がって行って、すぐ五、六歩後から歩いて来る、女たちの足許に止まった。若い方の娘が、すぐそれを拾ってくれた。彼女は羞じる様子もなく、快活に私の方へ走って来た。

「どうも……どうも、ありがとう。」

私はどぎまぎしながら、やっと口の中で礼を言った。そして急いで帽子を被り、逃げ出すようにすたすたと歩き出した。宇宙が真赤に廻転して、どうすれば好いか解らなかった。ただ足だけが機械的に運動して、むやみに速足で前へ進んだ。

だがすぐ後の方から、女の呼びかけてくる声を聞いた。

「あの、おたずね致しますが……」

それは姉の方の娘であった。彼女はたしかに、私よりも一つ二つ年上に見え、X 怜悧な美しい瞳をした女であった。

「滝の方へ行くのは、この道で好いのでしょうか？」

そう言って慣れ慣れしく微笑した。

「はあ！」

私は窮屈に Y 四角ばって、兵隊のような返事をした。女は暫らく、じっと私の顔を眺めていたが、やがて世慣れた調子で話しかけた。

「失礼ですが、あなた一高のお方ですね？」

私は一寸返事に困った。

「いいえ」という否定の言葉が、直ちに瞬間に口に浮んだ。けれども次の瞬間には、帽子のことが頭に浮んで、どきりと冷汗を流してしまった。私は考える余裕もなく、混乱して曖昧の返事をした。

「はあ！」

「すると貴方は……」

女は浴せかけるように質問した。

「秋元子爵の御子息ですね。私よく知って居ますわ。」

私は今度こそ［　ウ　］返事をした。

「いいえ。ちがいます。」

けれども女は、尚疑い深そうに私を見つめた。4 或る理由の知れないはにかみと、不安な懸念とにせき立てられて、私は女づれを後に残し、速足でずんずんと先に行ってしまった。

私がホテルに帰った時、偶然にもその娘等が、隣室の客であることを発見した。彼等はその年老いた母と一緒に、三人で此所に来て居た。いろいろな反覆する機会からして、避けがたく私はその女づれと懇意になった。遂には姉娘と私だけで、森の中を散歩するような仲にもなった。その年上の女は、明らかに私に恋をして居た。彼女はいつも、私のことを「若様」と呼んだ。

私は最初、女の無邪気な意地悪から、悪戯に言うのだと思ったので、故意と Z 勿体ぶった様子などして、さも貴族らしく返事をした。だが或る時、彼女は真面目になって話をした。ずっと前から、自分は一高の運動会やその他の機会で、秋元子爵の令息をよく知ってること。そして私こそ、たしかにその当人にちがいなく、どんなにしらばくれて隠していても、自分には解ってるということを、女の強い確信で主張した。

その強い確信は、私のどんな弁駁でも、撤回させることができなかった。しまいには仕方がなく、私の方でも好加減に、華族の息子としてふるまって居た。

最後の日が迫って来た。

かなかな蟬の鳴いてる森の小路で、夏の夕景を背に浴びながら、女はそっと私に近づき、胸の秘密を打ち明けようとする様子が見えた。私はその長い前から、自分を偽っている苦悩に耐えなくなっていた。自分は一高の生徒でもなく、況んや貴族の息子でもない。それに図々しく制帽を被り、

好い気になって「若様」と呼ばれて居る。どんなに弁護して考えても、私は不良少年の典型であり、彼等と同じ行為をしているのである。

5 私は（　　）に耐えなくなった。そして一夜の中に行李を調え、出発しようと考えた。

翌朝早く、私は裏山へ一人で登った。そこには夏草が繁って居り、油蟬が木立に鳴いて居た。私は包から帽子を出し、双手に握ってむしり切った。麦藁のべりべりと裂ける音が、不思議に悲しく胸に迫った。その海老茶色のリボンでさえも、地面の泥にまみれ、私の下駄に踏みつけられていた。

（注）1 パナマ帽・タスカン――「パナマ帽」はつばの狭い白っぽい夏用の高級な帽子。「タスカン」は上等な麦わら帽子。

2 一高――第一高等学校の略で、東京大学予備門を前身とする旧制高校。

3 アルト・ハイデルベルヒ――ドイツの作家W・マイヤー・フェルスターの戯曲「アルト・ハイデルベルク」のこと。ザクセンの皇太子が美しい大学町ハイデルベルクで夢のように楽しい大学生活を送るという話で、日本でも当たりをとりしばしば上演された。

4 行李――竹や柳で編んだ箱形の物入れで、旅の荷物入れ、または荷物のこと。

5 レーキホテル――一八九四年に創業した「レーキサイドホテル」のこと。

6 書生袴――学生がはく袴のこと。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問一 二重傍線部X～Zについて、その意味として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

14 X「怜悧な」

① かしこく利発な
② 冷ややかな
③ 落ち着いた
④ 透き通るような

15 Y「四角ばって」

① はにかんだ表情で
② 緊張で声が上ずって
③ とげとげしい様子で
④ 堅苦しい態度で

16 Z「勿体ぶった」

① よそよそしく見せかけた
② 重々しく振る舞った
③ おそれ多くて恐縮した
④ 気にしないふりをした

問二 空欄ア～ウに補う表現として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

17 ア ① 足を取られる　② 足がすくむ　③ 足をすくう　④ 足が奪われる

18 イ ① 因　② 異　③ 否　④ 愚

19 ウ ① 混乱して、うっかりと
② 口ごもって、ゆっくりと
③ 大きな声で、はっきりと
④ 打ち解けて、しっかりと

問三　傍線部1「きまって一つの熱情にとりつかれた」とあるが、当時の「熱情」を今の「私」はどのように捉えているのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

20
① 一高に対する過剰なうらやましさからもたらされたと考えられる、地方に住む青年が陥りやすい感傷。
② 小説世界の登場人物へのあこがれからそれを象徴する帽子に向けられたと思われる、取るに足りない情熱。
③ 上質なものよりもあえてつまらないものに価値を置こうとする、青春時代に誰もが経験する常識への反発。
④ 遠くかけ離れたものへの強いあこがれが一高の帽子に向けられたにすぎない、未熟な精神性の象徴。

問四　傍線部2「それは私の空想裡に住む人物としても、当然選定さるべきの旅館であった」とあるが、どのようなことを意味しているのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

21
① 湖畔のレーキホテルは自分の好きな小説の舞台となった場所で、当然選ぶべき宿だったということ。
② 避暑地の宿屋としてレーキホテルは有名なので、小説の主人公なら選ぶはずだと確信したということ。
③ 自分が選んだ宿は、小説の主人公になって空想の世界に浸るのにうってつけだったということ。
④ 小説の人物になりきっていたので、選ばれた宿が空想していたものとそっくりだったということ。

問五　傍線部3「その詩集は索引の鉛筆で汚されて居り、所々に凋(しお)れた草花などが押されて居た」とあるが、本文からうかがえる「私」の人物像として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

22
① 異国情緒に魅せられて外国文学に強く引かれ、空想に没頭して後は顧みない人物。
② 文学センスがあり繊細な神経を持っているが、物を大切に扱わない粗野な人物。
③ 勉強熱心で理知的に物事を捉えられるが、計画性がなく大胆に行動する人物。
④ 感性が豊かで甘美な夢やあこがれを抱き、感情的で情緒に流されがちな人物。

問六　傍線部4「或る理由の知れないはにかみと、不安な懸念」とあるが、どのような気持ちなのか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

23
① 美しい娘に貴族だと思われたことのうれしさと、帽子を疑われて一高の学生でないことがばれるのを恐れる気持ち。
② 若い娘の美しさに引かれて気恥ずかしい思いと、自分が他人と勘違いされたままであることを気がかりに思う気持ち。
③ 若い娘にからかわれてきまりが悪い思いと、疑い深い目を向けられていることに身が縮み落ち着かない気持ち。
④ 美しい娘に対してなんとなく気後れを感じるのと、自分の正体が見破られたことに怯(おび)えてはらはらする気持ち。

問七　傍線部5「私は（　　）に耐えなくなった」について、空欄に入る感情を表す言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

24
① 妄執　② 悲痛　③ 感傷　④ 悔恨

問八 「私」にとって「夏帽子」の思い出とはどのようなものだと考えられるか、本文から読み取れる内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。

25

① 理想と現実とのギャップを思い知らされ、社会のありようを考える契機となった、夢見がちな青春時代の終わりを告げるもの。

② 勇気のなさから取り返しのつかない事態を招くことになり、自分の心の弱さを克服しようと決心した、人生の転機となるもの。

③ 空想に耽るあまり人を欺く結果となり、青春時代のロマンとともに心の痛みを感じざるを得ない、未熟な自分を象徴するもの。

④ 自分を偽ったがゆえに恋人を得たという経験で、さまざまに交錯する人間関係の複雑さを知り、生きる術を教えてくれたもの。

Ⅲ

次の文章は『狭衣物語』の一節で、帝に求められて狭衣（中将の君）が横笛の演奏を披露している場面である。これを読み、後の問いに答えなさい。

宵過ぐるままに、笛の音いとど澄みのぼりて、雲のはたてまでもあやしう、そぞろ寒く、もの悲しきに、稲妻のたびたびして、雲のたたずまひ例ならぬを、A神の鳴るべきにやと見ゆるを、星の光ども、月に異ならず輝きわたりつつ、御笛の同じ声に、さまざまの物の音ども空に聞こえて、楽の音いとおもしろし。帝、東宮を始めたてまつりて、いかなることぞ、と1あさましう思しめし、騒がせたまふに、中将の君、もの心細くなりて、いたう惜しみたまふ笛の音をやや残すことなく、吹き澄まして、

（狭衣）稲妻の光に行かん天の原はるかに渡せ雲のかけ橋

と、音のかぎり吹きたまへるは、げに、2月の都の人もいかでか聞き驚かざらん。

楽の声、いとど近くなりて、紫の雲たなびくと見るに、（注1）天稚御子、（注2）角髪結ひて、言ひ知らずをかしげaに香ばしき童bにて、ふと降りぬたまふと見るcに、（注3）糸遊のやうなる薄き衣を中将の君dにうち掛けたまふと見るに、我はこの世のこともおぼえず、めでたき御ありさまもいみじうなつかしければ、この笛を吹く吹く帝の御前にさし寄りて、B参らせたまふ。

C九重の雲の上まで昇りなば天つ空をや形見とは見ん

と申すままに、いみじくあはれと思ひたるけしきながら、この天稚御子に3引き立てられて立ちなんとするを、帝、東宮も、何しに、かかることせさせつらん、と悔しうて、笛をば取らで、手をとらへさせたまひて、4いみじう泣かせたまへば、この御子もいと心苦しう思しわづらひたるけしきにて、うち泣きつつ、何事もこの世には余りたるに、笛の音さへ忍びがたさに迎へに降りたるを、（注4）かく十善の君の泣く泣く惜しみ悲しみたまへば、えひたすらに今宵率て昇らずなりぬるよし、Dおもしろくめでたう文に作りたまひて、声は聞き知らずおもしろうて誦じたまへるに、中将うち泣きて、心より外に口惜しう、かかる絆どもにひかへられたてまつりて、今宵御共に参らずなりぬるよしを、えも言はず空をうち眺めて誦じたまへる御声、けしき、世の人の言ぐさに、「この世の人にはおはせず、天人の天降りたる」とのみ言ひきこえたる、今宵ぞまことなりけりと、あさましう御覧じける。

（注）1　天稚御子――天上界の天人が少年の姿になって人間界に表れたもの。
2　角髪――元服前の少年の髪の結い方。
3　糸遊のやうなる薄き衣――天の羽衣のこと。
4　十善の君――天皇のこと。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問一　傍線部1～4の解釈として最も適切なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

26　1「あさましう思しめし」

① 驚きあきれてしまって
② 不吉な予感をお覚えになり
③ 嘆かわしい思いをおさせになり
④ 意外にお思いになり

27　2「月の都の人もいかでか聞き驚かざらん」

① 月の都の人はどうして聞いても眠りから覚めないのだろうか
② 月の都の人もどうして聞いてびっくりしないことがあろうか
③ 月の都の人にもどうにかして聞かせて目覚めさせたいものだ
④ 月の都の人はどういうわけで聞いてもびっくりしないのだろうか

28　3「引き立てられて立ちなんとするを」

① 引っぱられて昇天させられそうだったが
② むりに連れて行かれそうになったのを
③ 連れられて昇天しようとするのを
④ 連れて行かれそうになって立っているが

29　4「いみじう泣かせたまへば」

① たいそうお泣きになるので
② たいそうお泣きになるならば
③ ひどく泣かせてしまわれるので
④ ひどく泣かせておしまいになると

問二　傍線部A「神の鳴るべきにやと見ゆるを」の「に」と文法的な働きが同じものを、次の中から一つ選びなさい。

30

① a「言ひ知らずをかしげに」
② b「香ばしき童にて」
③ c「ふと降りぬたまふと見るに」
④ d「中将の君にうち掛けたまふ」

問三　傍線部B「参らせたまふ」の文法的説明として正しいものを、次の中から一つ選びなさい。

31

① 謙譲の動詞「参る」＋使役の助動詞「す」＋尊敬の補助動詞「たまふ」
② 謙譲の動詞「参る」＋尊敬の助動詞「す」＋尊敬の補助動詞「たまふ」
③ 謙譲の動詞「参らす」＋尊敬の補助動詞「たまふ」
④ 謙譲の動詞「参る」＋尊敬の助動詞「せたまふ」

問四　傍線部C「九重の雲の上まで昇りなば天つ空をや形見とは見ん」について、この歌に関する説明として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

32

① 帝が天稚御子を押しとどめて、宮中に上がったらどんな昇進でもかなえるので天上界に行かないでほしい、と狭衣に返した歌である。

② 狭衣が天稚御子を慕って、宮中と隔たった雲の上に天稚御子が帰ってしまったら空を彼の形見として見よう、と帝に献上した歌である。

③ 狭衣が帝との別れを惜しんで、雲の上のはるか彼方に自分が昇ってしまったら帝は空を私の形見と思って見るだろうか、と詠んだ歌である。

④ 天稚御子が狭衣を天上界に誘い、はるか雲の上まで昇っていったら都の人は自分たちを思って空を見上げるだろう、と詠みかけた歌である。

問五　傍線部D「おもしろくめでたう文に作りたまひて」とあるが、ここでの「文」の具体的内容として最も適切なものを、次の中から一つ選びなさい。

33

① 狭衣を天上界に迎えに来たがむりやり連れて行くことはできなくなった、という趣旨で天稚御子が作った漢詩。

② 狭衣との別れに泣いている帝をなぐさめるために、天稚御子が狭衣を連れて行く理由をすばらしい字で書いた手紙。

③ 狭衣が宮中の人々に愛されているのを知った天稚御子が、狭衣のすばらしい様子をたたえるために作った漢詩。

④ 狭衣が天稚御子に魅せられてついて行こうとするのをやめさせようとして、帝が狭衣への思いを趣深く書いた手紙。

問六　本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選びなさい。

34

① 狭衣は天の羽衣を掛けられたときに我に返り帝に笛を形見として献上しようとした。

② 帝は狭衣が形見として献上した笛を受け取ったが天上界に行くことは許さなかった。

③ 狭衣は人間ではなく天上界から降りてきた天人だというわさが一夜で世に広がった。

④ 狭衣は天稚御子と天上に昇りたかったが引き止められて残念に思う気持ちを吟詠した。

問七　『狭衣物語』は『源氏物語』の影響を大きく受けているといわれるが、『源氏物語』より後に成立した作品を、次の中から一つ選びなさい。

35

① 落窪物語　② 大和物語

③ 堤中納言物語　④ 伊勢物語

国語の問題はここまでです